

二一世紀に「古典」となりうるような経済学の本は何だろうかということを考えようとしたとき、最初に思い出したのは、京都大学での師だつた菱山泉（一九二三～二〇〇七）の言葉である。

菱山先生は、イタリア出身の天才的経済学者ピエロ・スラッファ研究の権威者だつたが、スラッファのライフワーク『商品による商品の生産』（原著初版一九六〇、有斐閣※以下、特に記さない場合は原著初版発行年、出版社名は邦訳の出版元）が学界に本当の意味で理解されたには「最低でも五〇年はかかるだろう」と言っていた。私が大学院生の頃だから、一九八〇年代後半に聞いた言葉である。

私も経済思想史家の一人だから、いまでは、「古典」や「名著」と呼ばれるには、最低でも五〇年はかかるという言葉の意味が次第にわかるようになった。経済学にも流行の波はあるのだが、第一級の古典なら、マルクスの『資本論』第一巻（一八六七）やケインズの『雇用、利子および貨幣の一般理論』（一九三六）のように、一度は人気をなくしてもいつの間にか不死鳥のごとく甦つてくる。反対に、現在は脚光を浴びているけれども、一〇年もしないうちに忘れられてしまうベストセラーも多い。

二一世紀に「古典」となりうるような経済学の本は何だろうかということを考えようとしたとき、最初に思い出したのは、京都大学での師だつた菱山泉（一九二三～二〇〇七）の言葉である。

さて、私が大学で現代経済思想を教えるとき、一つのメルクマールにしている年がある。それは、ジョン・F・ケネディ（一九一七～六三）が大統領に当選した一九六〇年である。アメリカのリベラル派が隆盛を極めていた時期だが、現代の古典を挙げるときも、一九六〇年前後から始めるのがわかりやすい。ケネディの友人で、一貫して彼を支持したジョン・ケネス・ガルブレイス（一九〇八～二〇〇六）の『ゆたかな社会』（一九五八）は、現在も読み継がれており、少なくとも数十年後に消えていくとは思えない名著の一つである。

ガルブレイスは、ある年齢層より上なら、日本で『不確実性の時代』（一九七七／邦訳一九七八、TBSブリタニカ）がベストセラーになったことを覚えているだろうが、その本はいわばガルブレイス流の経済思想史入門なので、将来、古典として高く評価されることはないだろう。やはり重要なのは、『ゆたかな社会』か

そういうことを考えると、現時点いや数十年先に何が古典になりうるのかを予想するのはとても難しい。したがつて、これから書いていくことも、あくまで参考程度にしかならないだろう。読者もその点に留意して読んでほしい。

**巨人ガルブレイスが考えた「豊かさ」**

消費者主権とは、消費者の嗜好や欲求が企業がどのような財を生産するかを規定するということだが、スタンダードな経済学では、限られた予算内での効用最大化問題を考えるときに、この消費者主権が暗黙裡に仮定されている。消費者自身が自分の欲求とは何かを明確に把握していないければ、限られた予算をどの財に費やしたらよいのかわからなくなるので、当然といえば当然の仮定である。これは経済学部の一年生でも知っていることだ。

だが、ガルブレイスは、大企業は派手な広告やテレビのコマーシャル等（現代ならインター ネット上のあらゆる販売術が含まれる）を通じ

『新しい産業国家』（一九六七、講談社文庫）だが、一般的の読者にも読みやすいという点で前者が勝ると思う。なぜ『ゆたかな社会』が重要かといえば、スタンダードな経済学の基礎前提である「消費者主権」の虚構性を暴露し、「市場」中心主義的なものの見方（現代なら、「市場原理主義」という人もいるかもしれないが、それは学術用語ではないので、私自身はあまり好みない）に反省を迫った力作だからだ。

# 経済学の歴史から予測する 21世紀の古典

根井雅弘

（経済学者／京都大学大学院教授）

一冊の本があるとき、突然、古典になるわけではない。  
その本が生まれた時代の状況、前後の歴史、人びとの心理……  
などが影響し、一冊の本は古典となる運命を歩む。

とりわけ経済学の本は、人びとを取り巻く経済状況、お金への意識といったその時々の見えざる手の影響を受けやすい。  
20世紀半ば以降の経済学の流れを踏まえつつ、  
21世紀の古典となるであろう経済書を予測する。



上段左から『ゆたかな社会』ガルブレイス（鈴木哲太郎訳、岩波現代文庫）／『資本主義と自由』ミルトン・フリードマン（村井章子訳、日経BP社）／『合理的な愚か者 経済学＝倫理学的探究』アマルティア・セン（大庭健、川本隆史訳、勁草書房）／下段左から『ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか?』（上・下巻）ダニエル・カーネマン（村井章子訳、友野典男解説、ハヤカワノンフィクション文庫）／『21世紀の資本』トマ・ピケティ（山形浩生、守岡桜、森本正史訳、みすず書房）／『満足の文化』J・K・ガルブレイス（中村達也訳、ちくま学芸文庫）

